

【ぶくぶく】

「かいじいは、おちゃをのむかのう」

一応きいてみました。

「それは飲みます。祠の外なら火くらいおこせますから、川の水を沸かして、お茶を飲みますね」

懐爺はお茶を飲む真似をしました。

「かいじいの、のむおちゃは、ぶくぶく、あぶくがたつかのう」

「それはあぶくくらいたちますが、ぶくぶくなんて音はしませんね」

「そうじゃろうのう。けんど、わしのおちゃは、ぶくぶく、おとがするんじゃ」

「それはうるさいですね。まるでぶんぶく茶がまです。お茶を飲む時くらい静かに飲みたいものです」

懐爺らしい。

「わしはかいじいとちがって、ふうりゅうなこといわんが、うるさいのはこまるぞい」

「それはそうでしょう。ぶくぶくいうお茶なんか、飲みたくなくなりますね。それにそのぶくぶくは、【ぶくぶく】というおぼけですから、ぶくぶくいうお茶は、飲まないほうがいいでしょう」

「もうのんじまったぞい。はらのなかに、おぼけがいるぞい。ぶくぶくうるさいぞい」

「それはお腹をこわしているだけでしょう。わたしが薬を持ってきましたから、それをのめばすぐになおりますよ」

懐爺は祠に消え、すぐに丸薬を持ってでてきました。

「かいじいよ、わしにまた、はなくそを、のますきじゃろ」

「そんな失礼なことしませんよ。それにわたしは清潔好きとっているでしょう」

「せいけつずきは、はなのあなもせいけつにしたくて、はなくそをほじるから、こまったもんだ」

「憎まれ口きかないで、はやくこれを飲んでください。白湯（さゆ）ももってきましたから」

「しんせつすぎて、きもちわるいのう」

「わたしはいつも親切ですから、いつも気持悪いんですね」

懐爺はむくれました。

あるいは、むくれるふりをしました。

こうなったら、鼻くそを飲むしかない。

鼻をつまんで飲んだら、すぐにお腹がぶくぶくいわなくなりました。

「かいじいの、はなくそは、きくのう」

「金ちゃんの誉めかたは、ききますねえ」

懐爺は苦笑しました。